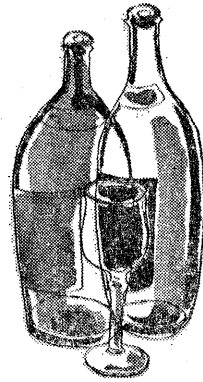


SF的読み解き

子どもという風景

第三回 語部たち



堀内 守

1

時の交錯

語部。カタリベと訓む。

この語を読むと、さまざまなのが想像される。つきからつきへと想像はふくらんでいく。やや妄想の気味があるが、この妄想はなかなか捨て難い。

普通の国語辞典などには「語部」については以下のような説明がしてある。

「上代、文字のなかつたころ、朝廷に仕えて、古い言い伝えや伝説を語り伝えることを職業とした一族」

すつきりとした説明である。ちゃんと刈り込んで、整然と説明している。妄想を楽しんでいた者は、こういう説明に出会うと、一瞬恥ずかし気な気分に入られる。

辞典のすっきりした説明は、よそ行きの衣裳を着けているようで、立居ふるまいが立派である。これに對して、妄想の方は雑談のようなもので、あらぬ方へ広がって行く。とうてい人様の前にお見せするようなものではない。

そんな気になってくる。しかし、少々角度を変えてみると、この妄想の群も捨てたものではないように思えてくるからふしぎである。妄想を妄想であると承知の上で、少しばかりていねいにおつき合ひしてみるのである。そうすると、あの辞典の説明だけではわからない面白い面が見えてくるようである。

語部というと、稗田阿礼ひえだのあれなどが思い出されよう。古事記選修に当たって、帝紀や旧辞を誦習とくねりした舎人とねりというのが歴史辞典の説明である。

阿礼についてもいろいろな説明がなされている。長い伝承を暗記していたというから相当な年齢に達していたかと思うと、実は当時二十歳だったというような解説もなされてある本もある。こうなると、若者のイメージで

ある。聡明だったに違いないが、どんな調子で語ったのだろうか。「誦習」という説明用語ではわからないが、阿礼が淡々と語ったことはいないだろう。

そこで妄想が働き出すのである。そして、こういふときの私たちの身も心も次第に通常のカミシモをぬいで、活気をもってくるだろう。のみならず、もし私たちが素直にわれとわが身を反省してみれば、そのときの私たちの構かまえは、職業といえヨロイを外し、他人の目も気にせず、ひとりで憩い、ハメを外し、悦に入り、観念と戯れ、ことばと戯れているはずである。

阿礼について言えば、古事記編纂のころ二十歳ぐらいだったという説のほかは、実は女性だったという説もある。そうなると、古事記にまつわる私たちのささやかな知識も組み替えざるをえなくなろう。年をとった語部のイメージよりも、若き女性のイメージが浮きあがってくるからである。

ささやかな知識という積み木をくずすのはわけはない。それを正しいと信じていなくともよいし、信じてい

なければならぬという義理もないから、このふくらみ行くイメージにおつきあいしてみるのである。特に気になるのは、その場合の阿礼の容姿よりも声である。声はどんな声だったか。高齢な男性のしわがれ声でもなく、若き女性の声だったとすれば、説話、伝承の類を語るころの語り口は、声は艶やかに、張りがあり、音域も広がったに違いないのである。のみならず、調子よく進みはじめたら、身ぶり手ぶりが語りに参画したことであろう。それを懸命に筆記していた太安万麿たちは、時には彼女の語り口に聴き惚れてしまい、筆記するのを忘れたこともあったに違いない。

かりにそうだったとすると、「あ、もういちど、はじめからやり直してくれ」というようなこともあったことだろう。

筆記する方は、今日の速記のようにサラサラとやることができたとはいえない。一行語ってもらって書き記し、さらに復唱してもらっては書き進んでいったに違いない。さてそうなれば、ここにこんなことも起り得たは

ずである。いや、かなりの確率で生じたと考えることができる。書記生たちが坐り机の前に長時間坐っている。そんな時、阿礼の語りを一寸一分まちがいに書き写したとは考えられない。

#### 書きことばという格こ子

「いずれのおん時にやありけん。そうそう、あれは去年の三月。桜の頃。三斗三升の酒飲んで、三人三様の笹かつき。笹山さやにさわげども、散々酔うて千鳥足。さ、よろしゅうございますか。あ、まだ。では、もう少しお待ち致します。」

書記生Aの筆記せし文「去年三月、三人の男が酒を飲んで、笹を売って歩いた」

書記生Bの筆記「いずれの時からかねど、桜の頃の話なり。三人揃って酒飲んで、笹の音聴きつさらざらと」(Bの独自。「これは調子が揃ってきた。以下、この調子の枠内にきちんと収めていくことにしよう」)

書記生Cの翻案せし文「さてさて、その場の人びと

は、三人三様の服装で、酒をささささ勧め合い、さっさと歩む足どりよ。

『さ、よろしいか』『あ、まだか』

『では待ちましょう、待ちましょう』

書記生Dの創作せし文

「あれはいつの頃だったか」と彼女は考え込んだ。

『あ、桜の頃だったわ、桜で思い出した。あの時、あら、おかしい。三人の貴公子がお揃いで酒など召しあがって……』

彼女の目には、あの時の三人の戯れ方がありありと浮んできた。笹の葉を手にとって戯れていた三人の男たち――いまはもう遠くに去ってしまった人びと。

『待っています』と言ったはずだったのに」

書記生Eの戯れ文

『あーあ』と阿礼はあくびを噛みしめて書記生たちを見やった。一人ひとりが筆の運びが違う。一回語ればすぐに筆を運ぶ者もいた。三回同じところを語っても、まだぶつぶつ口の中でことばを繰り返しながら、ゆっくり

と筆を運ぶ者もいた。顔つきもまちまちであった。待っている間、阿礼は退屈をまぎらすためにことばをいくつも付け加えたり、消略したりした。

書記生たちは時折しわぶきをする。阿礼にそれが彼らの信号のように思えてならなかった。『速すぎる。もっとゆっくり語れ』というようにもきこえた。『もっと大きな声で語れ』というようにも響いた」

書記生Fの筆記したもの

「(阿礼の声、調子よく)

いつ頃だったかとおたずねですか。そうです。去年の三月でした。まだ桜の咲き初めた頃、三人の方が三升ものお酒を召されましてね。いや、「三斗」というのは大仰な言い方です。大げさに表現した方が面白いというので語呂を合わせたのでした。

それほど、あの三人の方は上品に冗談を言い合っておられました。(阿礼、沈思)」

太安万曆の話

「いやあ、編集者としてはですな。責任が重大なんです

よ。何せ天武天皇という個性のお強い方がご自分の地位を確固としたものにしたいたいというお考えにより命じられた仕事ですからね。ところが、責任者である私が見ていきますと、書記生たちはまだ不慣れなものですから、どうもうまく書き取れない。十人十色、三人三様、まったくそれを正しい表現と判定していいのやら。以上はオフ・レコにしておいてよ。

さて、以下は発表してよろしい。

かねてから着手された古事記の編纂は、着実に進み、編集長太安万麿氏は、語り部たちと書記生たちの協力を大いに讃え、見通しは明るいと語った」

#### 数日後の記事

A紙、トップに大見出し。「古事記編集の壮挙。着々進行、太編集長、自信表明」

B紙、三面、囲み記事。「古事記の編集、意外なところに陥穽。編集長もガックリ」

C紙、社会面、「編集長のユーモア。古事記の編集の

裏話。若い者の統率の楽しさ。『苦勞するネ』と太編集長の笑顔」

D紙、「噂、ウワサ」欄。「もうかなり進んでいると思われていた古事記の編集作業は意外や意外、準備不足もたたってか、一日かけてもわずか数行しか進まない。秘められたこのニュース。本紙独占、特ダネ。編集長、懽然。読者の知る権利に答えよ！」

#### 2

#### 醒めてみて

妄想も無駄ではない。語部は一人ではなかった。集団をなしていた。のみならず、集団ごとの流儀スタイルを編み出していた。古代ギリシアのホメロス—あれは個人の名なのか、それとも語り部たちの集合名詞だったのか。そういえば、ホメロスをもって盲目の吟遊詩人に引きつけて理解する説もある。偶然か、阿礼を盲目の人として理解する説もある。あれほどの大きな内容を誦んじることができ

たのは並の人間のできることでなく、注意深い、神経の鋭ぎ澄まされた人でなくては不可能だという推理が両者を盲目の人に仕立てあげたのであろう。敬愛され、同時に並の世界の人でない人（異界の人）という畏れが複雑にからまり合っている。

何千年も、何百年も前の有名な人を思い出さずとも、私たちの身のまわりには語部が多かった。限りある話題を、相手かまわず繰り返し語る年寄りたち。噂の伝令使、「世間」の代弁者、「先祖」の代言人たち、「物知り」と評判の高かったご隠居さんたち。

語り口にも特徴があった。

### 無駄口

多くは生業と直接関係のない話題であった。「生業」を厳密に解釈すると、私たちのコミュニケーションの大半は「余分」なことにかかり合っている。しかし、生業そのものに彩どりとを与え、それを活気づけるものは「無駄口」であり、「見てきたような嘘」であり、「噂

話」であり、そこに存在しない他人に関する「悪口」であるようである。

平凡に時が流れていくような社会においても、これらの「無駄口」はいくつも型を生み出している。それが洗練されて、いつのまにか、しかるべき場に適った、しかるべき語りか形を整える。その多くは、語りというよりは唱えという共同の斉唱を残している。だからが一口唱えていくという念の入った祈念あるいは誓いのことば。それが、しかるべき場から独立していくと、語りが生まれる。

面白いのはその段階の語りが多分に唱えの要素を含み込んでいるということである。

第一、そこにはリズムが残っている。調子、間合い、音のアレンジの仕方。だから、筋の面白さよりもこちらの方を味わうことも可能になる。

「いずれのおん時にやありけん」↓「いずれの、おん時にや、ありけん」↓「いずれの、時にか、ありけんや」↓「さてさて、いずこの時なりや」↓「さあさあ、皆さん

寄っといで、とんとわからぬその昔、昔々のその昔、そのまた昔のその昔」↓…↓「昔、昔あったとき」↓「昔、昔、あったとき、ほら、あったとき、土佐の高知の知の高さ、傘は傘でもデモクラシー、暮しは暗し、倉はなし、……」

第二、そこにはカケアイの要因がつねに造出されている。演者は孤立してはいない。かならず、聴き手と呼んでいる。そして、当初は語り手と聴き手というように機能の上で二つに分かれていた者同士が、ある段階に達すると、たがいに相手側を挑発するようになり、やがて合唱あるいは即興の創作にまで発展したりする。

第三は、そこには日常の世界とは異なる第二の世界が現出するということが挙げられる。「第二の世界」とは可能的なものとは限らない。むしろその特徴は不可能であることに求められるかもしれない。だが、まったく見えないということでもない。要するにリズム的なのである。したがって、調子が合えば、だれでもいつのまにか参動してしまっている。

だから、かりに語り手が独演しているように見える場合でも、聴き手の方の心の中では語り手の語りに応じ、物語が演じられていると考えることもできるのである。

### 3

#### 語部と哲学者

身近な語部たちは、近所の老婆、老人たちという姿をとって現われることもあった。また、書物という形をとって現われることもあったり、まれに教師という形をとって現われることもあった。両親も語部の姿をとることもあった。

その世界は、すでにのべたように「第二の世界」である。鳥獸が物を言い、木や竹までが物を言う世界であった。私たちはそれを今日では「童話」のなかに押し込め、お伽話のなかにのみ存在するように思っている。だが事はそれほど単純ではない。もし、それらの「第二の世界」を一つの世界観とみなしてみるとしたら、私たち

は、祖父母や両親から聴かされた昔話や事の由来話のなかに、哲学者たちの解釈した世界とよく似た構造を発見して驚かされるだろう。

早い話が「自然」というイメージである。あえて概念ということはやめよう。このどこかすっきりしないイメージは、自然科学の洗礼を受けた人でも自然科学的な自然だけがすべてだと思ふことはないだろう。「宇宙」「天文」「進化」等々のどれをとってみても語部たちの語った自然像がまつわりついている。「原因」「結果」にしてもそうである。

語部たちは「因果」についてどう語つたろうか。古代ギリシアの哲学者アリストテレスの説明と田舎の老婆たちの説明とのあいだに大きなへだたりがあったのだろうか。

そんなことはない。

「原因」はつねに「由来」や「いわれ」「由緒」といっしょに織りあげられていたし、「因果」はつねに「因縁」や「果報」「応報」と絡まり合っていた。

アリストテレスは「自然哲学」という枠内で語っていた。田舎の老人たちはムラやマチという世界における経験をもとにして語っていた。自然、ネイチャー、ナチュール、プロダ……は名詞。だが、「自然」は、ある時は「無理」の反対であり、ある時は「蛮」の反対であった。人為の世界が自然の世界に投影されたものであることもあった。だが、どうだろう。これらのほかに「自然」には善という価値も含められていた。自然法である。そういう言い分をアリストテレスもムラやマチの老人たちも語っていた。

### 子宝、かすがい

隠喻も豊かだった。一つのできごとについての隠喻。

「子はかすがいだよ」「負うた子に教えられ」「子宝」。

それらを語る文脈も隠喻にあふれていた。どこまでが確固たる知識なのか、どこまでが楽しみなのか、境界は定かではない。何しろ、打てば響く人間関係のなかで交わされる会話なのだから。「子どもは風の子」「寝る子は



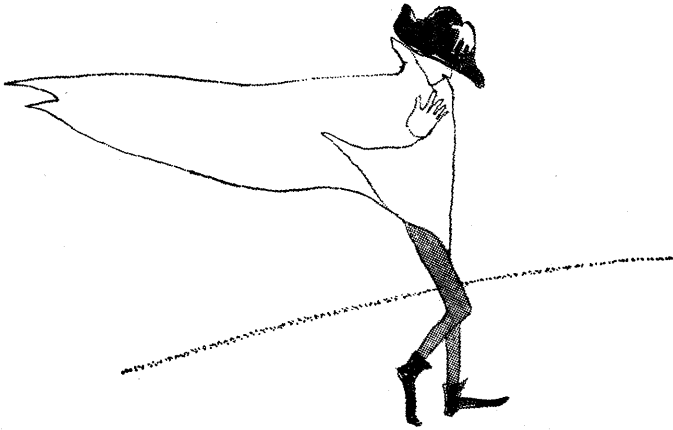
育つ」「泣く子は丈夫」。どこまでが大人の領分の話なのか。どこまでが真剣で、どこまでが戯れ言の世界なのか。騙りか。

いわばそれは揺籃の世界の風景なのである。

揺れている。快く揺れている。

かりに、それを朗誦してみることにしよう。ギリシア語の「テー、テス、テー、テン」を学ぶ必要はない。ローマ人が「ヴィーナス」と呼んだ女神はギリシア語では「アフロディーテ」という。その元の意は何と「泡」である。「泡」の連想が彼女を海から誕生したという物語に連れて行った。こういう遊戯をやるのは古代のギリシア人にはお手のものであった。どこまでが本気で、どこまでが遊びなのか。アリストテレスの『形而上学』と訳されている書物は名前からして難解そうだが、それは名前の音や文字によるところが多い。殊に訳語が人を驚かせる。

何のことはない。その原意は「メタ・フィシカ」アリストテレスは『フィシカ』（自然）という書物を書き、



その「あとで」、それを「超える」本を書いた。「メタ」とは「あと」である。それが難解な「形而上学」となるとはアリストテレスも知らなかったろう。

この『形而上学』は面白い本である。語の分析、用語法集。眠れない時はこの本をひもとくに限る。そして、少々むずかしいと思ったら、自分が接したおバアちゃんたちの語り口にひきつけて解せばよい。アリストテレスが、あのおバアちゃん、このおバアちゃんの口調で語っているように思えてきて、それまでわからないと思えていたところも、急に生き生きとしてくる。

いろいろな「世間知」について語部よろしく語ってくれたおバアちゃんたちの大半は「あの世」に去った。けれども、「あの世」でもきつとにぎやかにおしゃべりをしてに違いない。

仕事の手を休めず、語ってくれた地獄の鬼の話、人さらいの話、要するに、異世界がいくつもこの世に口を開けていたのだった。

墓地、ゴミ捨場、寺の床下、古い井戸。これらは闇の

世界へ通じており、飲み屋、病院、工場は「五臓六腑」の世界の縮図だった。

寺の階段、神社の階段、学校の階段、家の中の階段。おバアちゃんたちの語りの世界では「階段」は成長や学校の隠喩だった。アリストテレスにとっても。アリ、リス、スト、トテ、テレ、レスにとっても。アリさん、リスさん、ストさん、トテさん、テレさん、レスさんにとっても。

(名古屋大学教授)